

唐揚げ店の狭いプレハブのカウンター裏、  
エンジニアの彼に、接客中に中まで、どちゅどちゅに暴かれ、  
精子を垂らしながらお仕事することになりました。

ちやほやされる私と、私に無関心な彼の話。

私が製造業の会社に転職して、三ヶ月が経った。

二十二歳の私は高卒で、これといったスキルは何もない。ただひとつ、神様が、いや、親がくれたちよつとした見た目の良さだけは自覚してる。仕事着を少しタイトに着こなし、現場の男の前で少しだけ首筋を見せる。それだけで、私の毎日はイージーモードだった。

けれど。

社内で唯一、私の笑顔が全く通用しない男がいた。

それは、システム部の久我さん、三十四歳。いつも黒髪を適当に流し、眼鏡の奥では、難しいコードばかりを追っている人だった。そんな彼は、社内では典型的なオタクとして扱われて、本人もそれを隠す様子がない。

でも、私は気づいていた。

ふとした瞬間に、眼鏡を直すその指が、驚くほど長くて綺麗なことを。メガネの奥に、吸い込まれそうなほど整った顔が、隠されていることに。ランチの時間に、彼と同じ店になった事がある。それはラーメン屋さんで、彼は眼鏡を外して食べていたのだ。そのとき、私はハッとしてしまった。

一回くらい、こっちを向かせてみたい。私を女として意識させてみたい。

たぶん、退屈な日常を壊したい私の、身勝手な好奇心でもあった。

その日の私は、会社が運営している路面唐揚げ専門店の店番だった。昼下がりのアイドルタイムの時、突然、在庫管理システムがフリーズする。

「嘘……。これ、どうすればいいのよ」

本社のシステム部に連絡すると、やってきたのは、あの久我さんだった。彼はプレハブの店に入るなり、黙って作業に入る。

私が唐揚げを作る……わずか数センチの距離に腰を下ろした。

カチャカチャ、カチャカチャ。

狭いカウンター内に、無機質なタイピング音が響く。揚げる肉を漬けた、ニンニクと醤油の匂いと、じゅわあと鳴り続けるフライヤーの音がする。そんな雑多な空間で、彼だけが異質な冷たい空気を纏っている。

……近い。……でもいい匂いにするんだ……この人。

いつもは気づかなかったけれど、彼からは、ほんのり香水の匂いがした。

「からあげください」

お客様がきて、カウンター越しに料金を受取った。すぐ唐揚げを渡すと、お客様はぺこりと頭を下げて行く。これが、この店の仕事だった。

「ありがとうございますー！」

すると隣で、彼が言う。

「……終わったぞ。データベースの同期ミスだった」

五分も経たずに、彼はキーボードから手を離した。

「ありがとうございます、久我さん。コーヒー飲めますか？」

「……ああ」

私が差し出した紙コップのコーヒーを、彼は拒まずに受け取ってくれた。そして、丸椅子に座ったままゆつくりと口に運ぶ。

「こんな所に一人で大変だな……」

「もう慣れました！ 一人だと気楽ですしね」

静寂が戻る。彼は黙ってコーヒーを啜ってる。いつもならここで終わる。なのに、今日の私はどうしても、この完璧な鉄壁を壊してみたくなった。

「久我さんって……女の子より、やっぱり機械の方が好きなんですか？」  
「なんだそりゃ？ ……質問の意図がわからんけど」

「だって。社内の誰が話しかけてもそんな感じだし。……エロいこととか、考えたりするんですか？」

我ながら最低だ。でも、彼はコーヒーを飲む手を止め、インテリ風に、眼鏡をクイツと押し上げた。そして、酷くカッコイイくて低い声で言う。

「……生物学的に正常な男だ。興味がないわけないだろ」

「プっ。かっこつけてます」

「あ。バレた？ でも、そりやあるよ。男だもんな」

「えっ……、意外です」

私は面白くなつて、自分の管理用ノートPCを彼の方へ向けた。

「じゃあ……こういうの見たります？」

画面に表示したのは、ネット動画だった。それも、激しい絡みのやつ。

『ああっ、んっ、そこ……っ、もっど、強くう……っ♡』

狭い店内に、場違いな女の喘ぎ声と肉がぶつかる生々しい音が響き渡る。



「……おいおい。仕事中に何を見せてんだよ」

「いいじゃないですか。久我さんの興味、ちよつと教えてくださいよ」

彼は、無表情のまま画面を凝視していた。けれど、だんだんと彼の耳が赤く染まっていく。眼鏡が少しだけ曇り、呼吸を押さえているのが分る。

そして私は、意地悪を言った。

「久我さん？ 耳、真っ赤ですよ？」

「エロいな……こんなの見てんのか？」

からかうつもりが、彼の剥き出しの反応に、私も疼きだしてしまった。視線を下げると、彼のスーツのズボンの股間が、パンパンに膨らんでいる。

「エッチ……なんですね」

「……男にこんなを見せるからだろ……分かってんのか？」

ガタツ！！　椅子が大きく鳴った。

「ひゃっ……！！？」

私は久我さんの腕に押され、カウンターに背中を押し付けられていた。

「静かにしろ。……外に聞こえるぞ」

んちゅ……っ、ん、ちゅぷっ……♡

いきなりの深いキス。だけど私は、ドキドキしながらも抵抗しなかった。

「ん……」

コーヒーの苦味と、彼の熱い舌が、私の口内を強引に蹂躪する。

「ん、んうう……う、ぷはっ……！！」

「……興味を教えろって言ったの、お前だぞ」

それはそうだけど……いきなり？

彼の大きな手が、私のお尻を掴んだ。

「ちよっ、ちよっ、ちよっ！ お客さんが来ますって」  
「じゃあ、立っている。お客がいつ来てもいいように」

私を店のカウンターに立たせて、彼がスルスルとしゃがみ込んでいく。そして私の後ろにしゃがみ、スカートの中に手を入れて来る。

「く、久我さん？」

「黙って」

さわさわと、太ももを撫でられるだけで肌が粟立つ。

「あっ」

「口を閉じてろ。変に思われるぞ」

私の視界には、駐車場と道路を走り抜ける車。そんな日常の風景なのに、下では太ももをまさぐられている。

するとそんな時……。

ヤバ……。

ブウウウ。と駐車場に車が入って来た。

「あ、ちよつと、お客さんです!!」

「ちゃんと対応しろよ」

「いや、あの!」

だが、じたばたしている暇はない。お客様が車を降りて、こちらに来る。

「い、いらつしやいませー」

さわ。

ビクン！

久我さんが、パンティの上から、私のおまんこをなぞった。